かささぎ 通信 第109号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2021年　12月　10日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年十一月の「森三郎の作品を読む会」では『赤い鳥』(1932.1)の「みかん」と、少国民文芸選『かさゝぎ物語』(1942.8)(帝国教育会出版部)の「柑子(こうじ)」の読み比べをし、森三郎の改作の意図を考えました。

『赤い鳥』(1932.1)の「みかん」については「森三郎の作品を読む会」通信第9号で報告したことがあります(2013.3)。大伴坂上郎女(さかのうえのいらつめ)の娘・小娘(おとめ)は光明皇后の女官でしたが、五か月ぶりのお宿下がりの時に珍しい「コウジ」という果物を三ついただいてきます。いまでいう「みかん」のことです。そのコウジにまつわる話が描かれています。

宮中での雪見の宴が終わった晩に、小娘は風邪気味だったにもかかわらず、待ちきれずに母の許に帰ってきます。そして唐土(もろこし)からきた「キツ」に「コウジ」と名付けた話、その種をこの国でもまいて実らせようとしている話など、女官たちの笑話を通して、宮中での生活の様子を母に語ります。その夜、久しぶりに母と並んで寝ていた小娘は、三つのみかんたちが人間の姿になって話している夢を見ます。二人の女性は故国にのこした子どもたちを想い、国に帰りたいと話しています。一人の男性は「どうせ人に食わはれるんぢやないか。どこのだれに食はれたつて同じだよ」というのですが、女性たちは「どうせ食べられるなら、もろこし人の子どもに食べられたい」と泣いています。夢を見て泣いていた小娘は、母の坂上郎女にコウジは食べないで唐土へかえしてやろうと言います。母に夢の話をして、次に唐土に渡る人に頼んで、唐土人の子どもに渡してもらおうというのです。

森三郎はこの話の最後に「附記」として『水鏡』(本文『大鏡』と誤記)の聖武天皇の「神亀三年と申しゝにはじめて唐土より柑子をもて来れり」の条や『万葉集』の坂上郎女、宿奈麿、大神朝臣の歌などをもとにして、空想でこしらえたお話だと断っています。

一方、帝国教育会出版部『かさゝぎ物語』(1942.8)所収の「柑子」には、光明皇后を中心とする女官たちの話の場面は一切出てきません。「キツ」をめぐる名付けの話、「キツ」の種を日本でも蒔いて育てようとしている話などは出てきませんので、当然、『水鏡』や『万葉集』からヒントを得たという附記もありません。「みかん」と「柑子」の構成を比較してみましょう。

「みかん」	一段	小娘のお宿下がり、お土産は皇后さまからいただいた三つのみかん。みかんにまつわる宮中での様子。
	二段	小娘が見た夢の話。みかんを唐土に返そうという話(附記あり)

「柑子」	一段	小娘のお宿下がり、お土産は皇后さまからいただいた三つのみかん。
	二段	三人の唐の人が故郷に帰りたがって泣いている話
	三段	小娘が夢の話をし、みかんを唐土に返そうという話。

「柑子」は二段目の話が小娘の夢の話だという前置き無しで、唐土人の二人の若い女が故国の子どもたちを想い、ぼつねんとしている場面から始まります。「いっそ、早く食べられちまつた方がいゝわ」という言葉から「みかん」の化身だと分かります。そして三段目でそれが風邪気味で熱に浮かされた小娘の夢の話だったと分かるようになっています。どちらも風邪気味で家に帰って来た小娘を母の坂上郎女が気遣い、休ませている点は同じです。しかし「みかん」の方は笑い話仕立てで、みかんが我が国に入ってきた歴史的経緯を古典との関係で示そうとしています。それに対し「柑子」の方は、故国の子どもを思う柑子の気持ちと、坂上郎女・小娘親子の情愛とがテーマになっているように思えます。

次回「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年一月十四日(金)午後一時半～三時半　実施予定

読み比べ　『赤い鳥』(1931.11)「三條中納言」と

『かさゝぎ物語』(1942.8.帝国教育会出版部)「鰻(うなぎ)」